



プレデター・デュアリティ
朽techS - 2018
MATURE CONTENT

天の環を仰ぎ見る 夜のふたつの終端
——Barren Earth「Where All Stories End」

SIDE A



◎タイタンの死せざる人鳥

◎夜を縫う受粉者

◎睡月の番龍

◎蒼褪めし廢位者

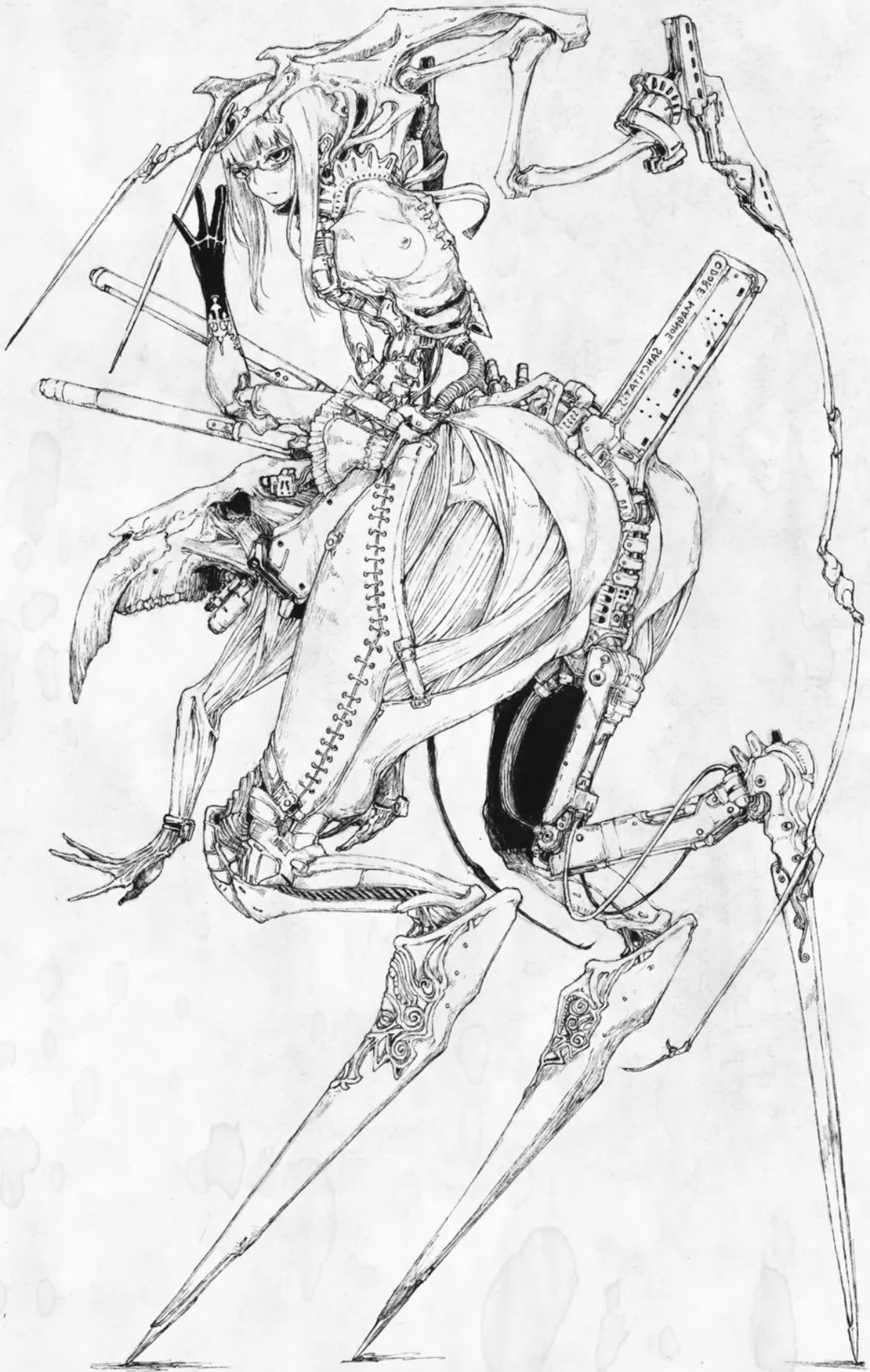
◎埋葬夢の洗礼者

◎鳥喰いガートルード

◎聖血鯨飲者



古き流血は古き袋に、
新しき流血は新しき袋に。
アカライネンが生きてたらそう言っただろうな。
——クラリモンド・バーナバス、マスター・ネクロテック





あんたのやり方にはうんざりですな。
影の中で苦しむ人々を救おうと投げかけた光で
より濃い暗闇をあちらこちらにばら撒いて、
それを一顧だにしない。
それもひとえにあんたが「普通の人々」を
見下しているからでしょう。
あんた自身がただの人間であることを我慢できないなら、
クラーケンコートでもどこでもいい、
さっさと限界を超えちまえばいいんですよ。
——ジャン・ヴァルモー、飛び地のレジスタンス指導者





例えば大理石の墓碑冷たさを、
動作と姿勢の緊張感で表現する。
夜の大気を凝らせたイメージで
輪郭を象る。
そういうことを意識し始めたときに、
ようやく本当の意味で
ネクロテック・エンジニアリングは
始まったのではないのでしょうか？
大沼で“共和主義者”たちが見よう見まねで
屍者と機械を縫い合わせたときではなくてね。

——コルヴォー・アヴァンティル、
屍史学博士、元“六羽鴉”のエンジニア



小夜鳴鳥の時間はもうおしまい。

——ネア・ヴィス・カリス、第二共和国の主任エンジニア



師よ、彼女たちは血を無為に
大地にこぼすためにこそいるんですよ。

——ミッコ・アカライネン、
マスター・ネクロテック

女の子のかたちの棺
俺はきみの中に葬られる

——Marilyn Manson 「Unkillable Monster」

INTERMISSION

ここでは異なる地より流れ着いた、
賓客のネクロテックたちを紹介いたします

◎隕騎卿の花皿 - 葡萄用図

◎野辺の送り犬 - 暹羅猫 葵

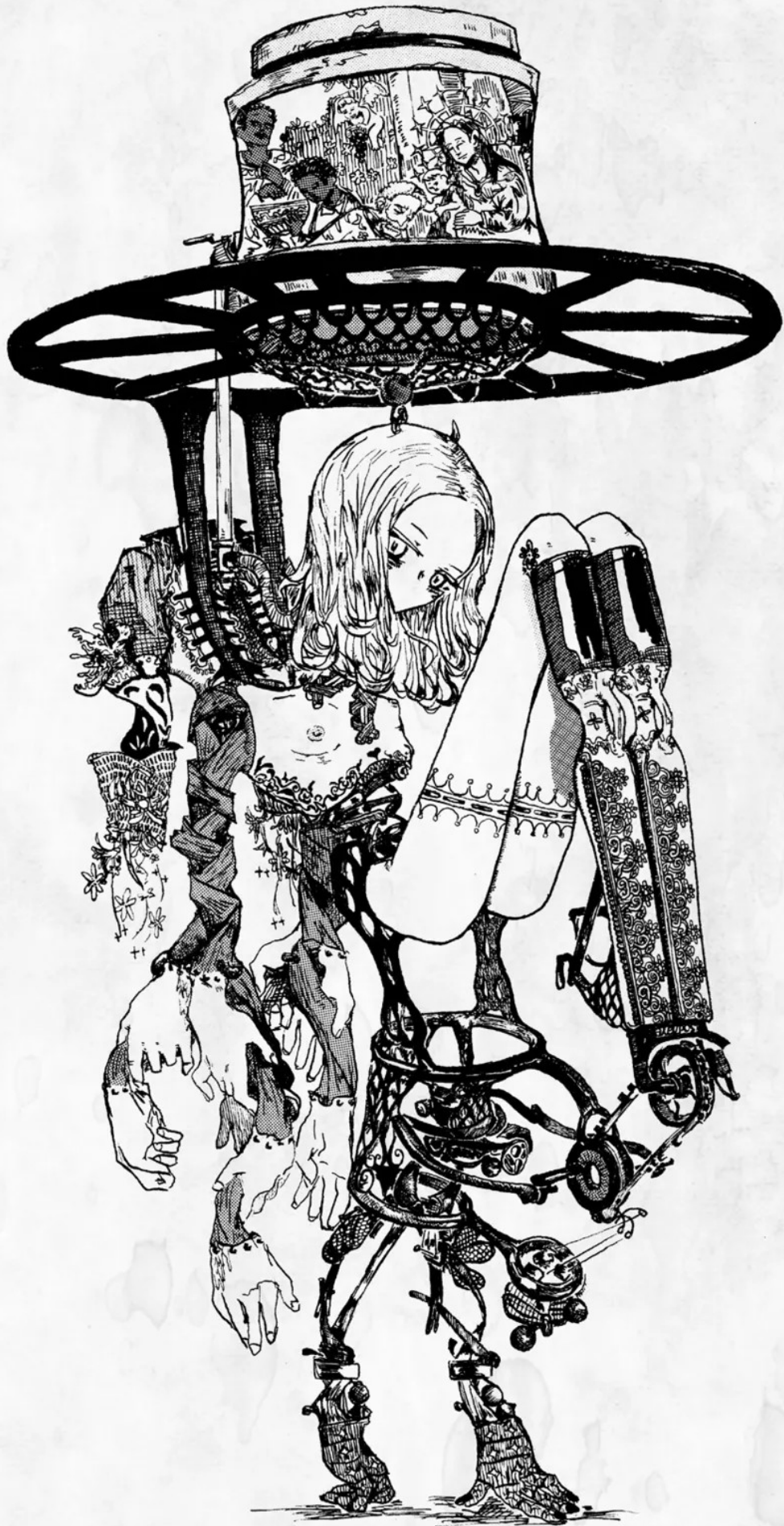
◎ハリの晩獣 - 半場

◎ラ・コセチャイル - パリング









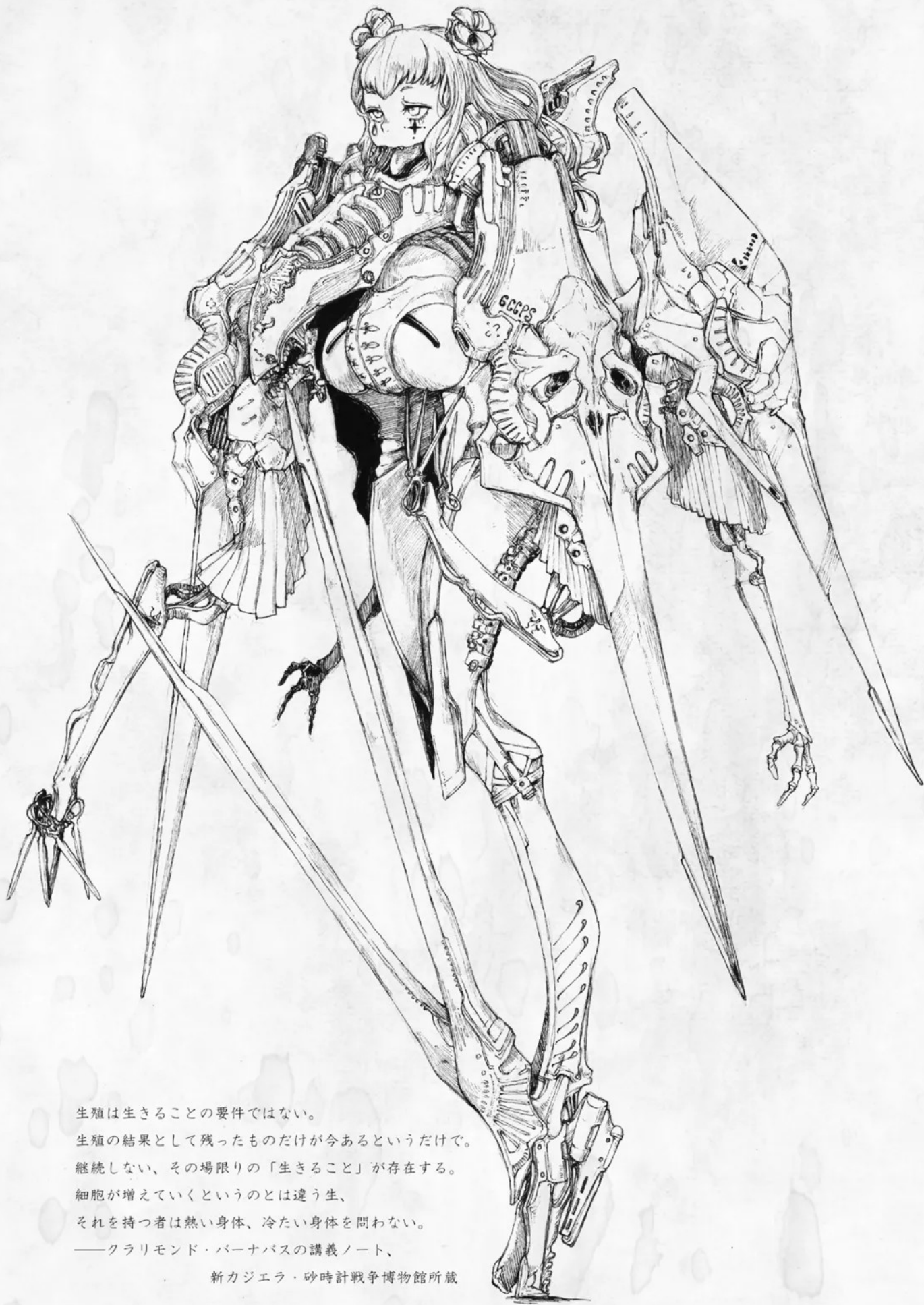
どこへ向かうというんだい、
生と死の違わたしいすらまだ分からないんだらう？

—— 『Cemetery Man』 (1994, Italy, Director: Michele Soavi)

SIDE B



- ◎虚星の道化師
 - ◎アヴトマート・チェルニ
 - ◎天使の爪痕
 - ◎真円のスガル
 - ◎黒曜のスキュレー
 - ◎クレプシドラの魔女殺し
 - ◎再来せる聖血鯨飲者
-



生殖は生きることの要件ではない。
生殖の結果として残ったものだけが今あるというだけで。
継続しない、その場限りの「生きること」が存在する。
細胞が増えていくというのとは違う生、
それを持つ者は熱い身体、冷たい身体を問わない。

——クラリモンド・バーナバスの講義ノート、

新カジェラ・砂時計戦争博物館所蔵



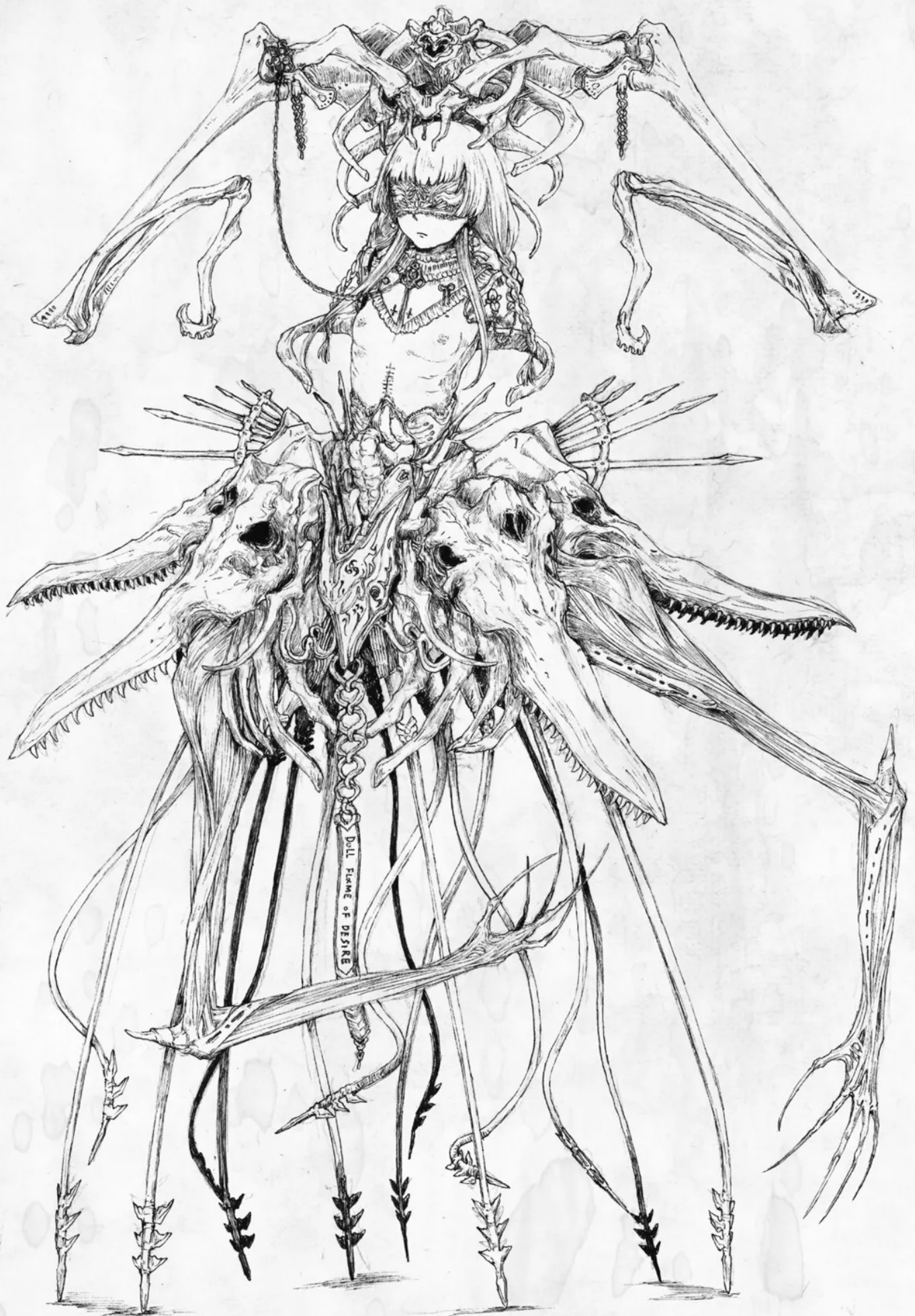


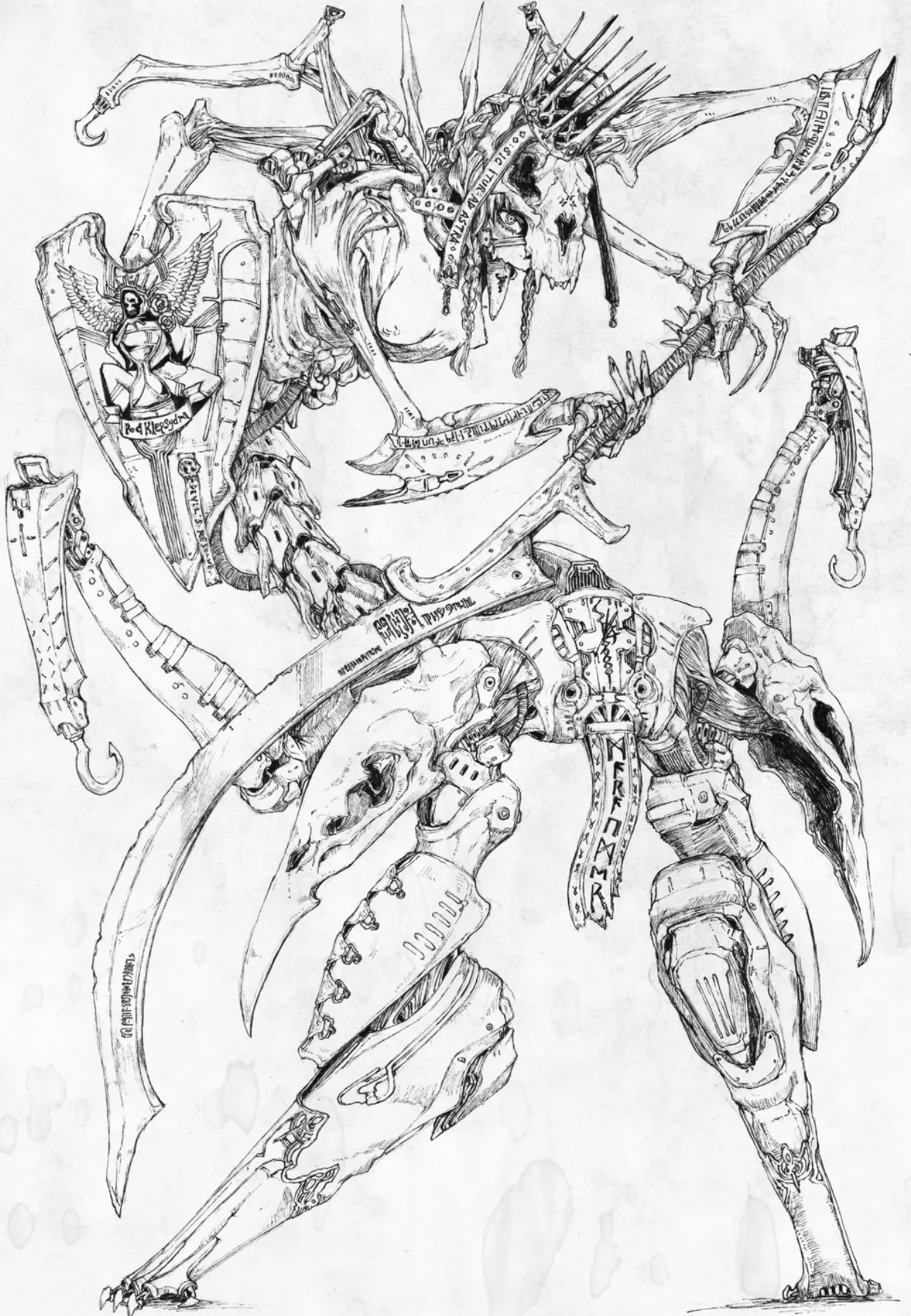
きみが絶望してるから
この世に望みはない。
きみが酷いと思うから、
この世は酷い。
きみが醜いから、
この世は醜い。
そんな単純なものなのか？

——カッシウス・デラモルテの書置き（日時不明）、

新カジェラ・砂時計戦争博物館所蔵











背後からの声がわたしに思い出させる
翼を広げよ 汝は天使
忘れずに運ぶのだ 光の速さで
ほんの少しの 愛と歓びを
——Queen 「March Of The Black Queen」

今年もこうやって地に足のつかないものを描き続けながら（死者は大地と親密ではない）、
人の人らしい生が、わたしたちの手が届かないところにあると思ひ込ませようとするような
何もかもを憎んでいるうちに時が経ちました。
そのことが今回のネクロテック達に悪い影響を及ぼしてないといいのですが。

ええ、そうです、ちょっと新しい試みがあり、というか QUEEN II のバクリなのです。
ホワイトサイドとブラックサイド（そしてインターミッション）なのです。
折しも今年『ボヘミアン・ラブソディ』が公開の年だったりもして、
相変わらずこういうよく分からないところで私は巡り合わせというか運が良いです。

そしてゲストの皆様、この度はダンスに付き合っただけで光栄です、マジありがとうございます。
（掲載順）葡萄用図様、暹羅猫 葵様、半場様、バリング様

ほか、スペシャルサンクスとして FANBOX で支援いただいた皆様！
一人一人の名前を載せることはできませんが、皆様のおかげで昨年のこの時期とは
比べ物にならないくらい環境的には余裕をもって製作できました。心より感謝申し上げます。

また会えることを強く強く望んでおります。暖かな泥濘の底より、愛を込めて。

——メグリム・ハルヨ



※過去作アーカイヴス電子版はこちら <https://deadwelders.booth.pm/items/151352>
<https://deadwelders.booth.pm/items/759437>

